

本庄国際奨学財団

Honjo International Scholarship Foundation

2019 WINTER 機関誌 Vol.6





本庄国際奨学財団 Honjo International Scholarship Foundation 2019 WINTER Vol.6

発行：公益財団法人 本庄国際奨学財団

〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-14-9

[TEL] 03-3468-2214 [FAX] 03-3468-2606

[E-mail] info@hisf.or.jp [URL] <https://www.hisf.or.jp>

2019.12

目次

- 02 理事長挨拶
財団の概要
- 03 公募案内
- 04 特集「世界の大学情報」
 - ① ムハンマッド ナシーフ アーサン
 - ② ユパナ ウィワッタナカンタン ③ 呉 泰雄 ④ レブランフォン
 - ⑤ 劉 姿汝 ⑥ オンパンダラ パンパキット
- 07 アメリカからの手紙 —— ニック ラブ
日本語医学用語語呂合わせと記憶術
- 09 エッセイ —— アドゥアヨム アヘゴ アクエテビ
夢に向かって一歩ずつ ～アフリカに義肢装具を届ける～
- 11 エッセイ —— 富樫 耕平
一生をかける仕事 行動分析士として
- 13 年間活動(2018年)
- 16 NEWS
 - オ デヒョンさん作家デビュー
 - 学生寮の運営開始
 - 春風荘の四季 / 春風寄席
- 17 22年間の軌跡 / Journey of 22 years

Contents

Words from the President	20
About Us	
Guideline for Scholarship and Research Fellowship in 2019~2020	21
Special feature "Information about universities around the world"	22
① Md. Nasif Ahsan	
② Yupana Wiwattanakantang ③ Oh Taewoong ④ Le Vu Lan Phuong	
⑤ Liu Tsu Zu ⑥ Onphanhdala Phanhpakit	
A letter from America —— Nick Love	25
Japanese medical mnemonics and "goroawase"	
Essay —— Aduayom-Ahego Akouetevi	27
Dream at my footsteps	
Essay —— Kohei Togashi	29
My Life as a Radical Behavior Analyst	
Timeline 2018	31
NEWS	34
● Oh Daehyeon made his debut as a writer	
● Student dormitory is now available	
Four seasons at Shunpu-so / Shunpu-yose	



理事長挨拶

理事長

本庄 八郎 Hachiro Honjo

本庄国際奨学財団の奨学生並びに同窓生の皆様
こんにちは。

私は昨年、本庄照子前理事長から理事長の任を引き継ぎました。1996年に兄の正則と本財団を創立してから、23年目を迎えますが、私も一貫して財団の役員を仰せつかり、その歴史と共に歩んでまいりました。その間多くの方のご支援や激励をいただいたことに深く感謝申し上げます。

この20数年で日本は大きく変化しました。こうした変化の中多くの留学生の皆さんが様々な困難を乗り越えて来日し勉学、研究に励んで来られました。

これまでの振り返ると、外国人留学生の出身国は、1期生は4か国でしたが、徐々に毎年10か国以上の方を採用するようになり、昨年までにその数は79か国となりました。学生数も留学生418名、日本人159名の計577名に上ります。

私は人間に貴賤はなく、国や文化にも貴賤はないと考えています。これからも多くの国から一人でも多くの方をこれからも採用していきたいと思います。私どもの財団がそのお役に立てればこの上ない喜びです。

加えて皆さんにお願いしたいことは、是非一つの輪となりお互い仲良くなってほしい。それこそが、日本と諸外国との心と文化の架け橋となる近道だと信じています。

組織が多くの節目を経て、あたかも竹のように強くなっていくように財団は時代の変化に対応しながら新たな歴史を刻んでいます。2017年には20周年という節目を迎え、国際シンポジウムを開催して皆さんとの旧交を温めました。次は30年に向かつてのスタートです。

昨年には永年の念願でありました学生寮を開設し寮生のほか海外在住の同窓生にも日本出張の際に利用していただいて好評をいただいております。ここで新たな奨学生の絆が生まれることを期待しています。

さらに本年、元号が令和に変わりました。この幕開けに際し、日本人の高校生のための奨学金を新しく立ち上げました。時代のニーズに対応し微力ながら向上心のある人材の育成に努めてまいります。

こうした経験と挑戦を通じ、これまで培った本庄財団の輪をさらに大きくしていきたいと考えています。今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い致します。

2019年冬

財団の概要

【名 称】公益財団法人本庄国際奨学財団

【英文名称】Honjo International Scholarship Foundation

【行政庁】内閣府

【設 立】1996年12月25日

【理事長】本庄 八郎（ほんじょう はちろう）

【目 的】

この法人は、学術研究への奨学援助および研究助成を行い、もって我が国と諸外国との教育・学術・文化における交流及び相互理解を促進するとともに、人材の育成及び教育・学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

【所在地】〒151-0063 東京都渋谷区富ヶ谷1-14-9

【電 話】03-3468-2214

【FAX】03-3468-2606

【E-mail】info@hisf.or.jp

【URL】<https://www.hisf.or.jp>

2019～2020年度 奨学金・研究助成金の公募案内

外国人留学生奨学金(秋奨学金) **NEW**

- [募集期間] 2020年4月1日～2020年4月30日(予定)
[募集人数] 若干名
[募集対象] 日本の大学院に留学する外国人留学生。
奨学金は9月または10月より支給開始します。

海外留学日本人大学院生奨学金

- [募集期間] 2020年4月1日～2020年4月30日(予定)
[募集人数] 若干名
[募集対象] 海外の大学院に留学する日本人留学生。
奨学金は9月または10月より支給開始します。

高校生奨学金 **NEW**

- [募集期間] 2019年12月20日～2020年2月29日
[募集人数] 10名
[募集対象] 日本の国公立高校(全日制)に通う日本人高校生1年生。
国公立大学に入学した場合は大学卒業まで奨学金を支給します。
奨学金は2020年4月分より支給開始します。

外国人留学生奨学金(春奨学金)

- [募集期間] 2020年9月1日～2021年10月30日(予定)
[募集人数] 15名～20名
[募集対象] 日本の大学院に留学する外国人留学生。
奨学金は2021年4月より支給開始します。

日本人大学院生奨学金

- [募集期間] 2020年9月1日～2020年10月30日(予定)
[募集人数] 若干名
[募集対象] 日本の大学院に在籍する日本人大学院生。
奨学金は2021年4月より支給開始します。

食と健康研究助成金

- [募集期間] 2020年9月1日～2020年10月15日(予定)
[募集人数] 5～6名(総額1,000万円)
[募集対象] 日本の研究機関で食品の健康に対する作用機序の研究に対する助成金。
2021年4月より助成します。

※募集期間等募集に関する詳細は、ホームページで公表します。
申請はインターネットによるWEB申請です。

特集

世界の大学情報

大学に勤めている先輩から各国の大学情報をいただきました。

質問

1

大学名(国)

質問

2

今のポジションと勤務期間(2019年春現在)

質問

3

- ゼミや講義の様子
- そのほかの大学内外での仕事

質問

4

- 大学の特徴
- 日本と特に違う点

質問

5

その他



ムハンマッド ナシーフ アーサン Md. Nasif Ahsan, Ph.D.
(2015~2017 奨学生/バングラデシュ)



- 1 クルナ大学社会学部経済学科(バングラデシュ)
- 2 経済学科の教授で学科長をしています。勤続14年です。
- 3 経済学を勉強してきましたがここ10年ほどは気候変動や災害リスクの軽減について研究しています。私の住むバングラデシュの沿岸地域は熱帯性サイクロンにより自然災害が起こりやすい場所です。現在災害マネジメントと気候変動について学部生と大学院生の二つのコースを担当しています。さらに年間を通して定量分析の実践コースを担当しています。経済学科長の役割は授業ルーティンのモニタリング、クラス編成、期末試験の調整などです。

- 4 クルナ大学は公立大学で7学部29学科に7,000人の学生がいます。クルナ大学はバングラデシュでユニークなアカデミックカレンダーを使っています。1月1日から6月30日が1学期、7月1日から12月31日が2学期です。日本の大学のように資金が豊富でないので、物資不足のために教育や研究に支障がおこることがあります。特徴的なのは、この大学研究者の17パーセントが日本の大学院で修士号または博士号を取得していることです。



ユパナ ウィワッタナカント Yupana Wiwattanakantang, Ph.D.
(1998~2000 奨学生/タイ)



- ① シンガポール国立大学(シンガポール)
- ② ビジネススクール教授 勤務年数10年
- ③ 一橋大学に留学し、卒業後一橋大学経済研究所で教えていたので、最初は日本の大学のやり方で講義をしていた。教員が一方向的に話すやり方。しかしあまり評価されなかったので方法を変えた。ケーススタディを多く用い、学生に質問を投げかけて答えを考えさせる。私は何も教えていない。学生の発言の回数をアシスタントが数えていて、学生の成績につながっている。アメリカのやり方である。授業の準備は大変だけど、評価はもらっている。

一橋大学にいたころは研究室に閉じこもり気味だったが、今は外に出て人に会うようにしている。

- ④ シンガポール政府は教育に大変力を入れている。世界中から優秀な先生をヘッドハンティングしている。給料は一人一人の実力にあわせて交渉して決まる。3年ごとに更新があり、ほとんどの人が更新できずに切られてしまう。論文を評価するシステムがあり、トップジャーナルに載らないと高評価を得られない。教育、研究、大学への貢献度(社会へのインパクト)の三つが教員を評価する柱となっている。



呉 泰雄 Oh Taewoong, Ph.D.
(2001~2003 奨学生/韓国)



- ① 龍仁大学(韓国)
- ② 副教授、4年目
- ③ 授業は運動栄養学、運動生理学がメインです。ゼミなどの内容は運動と栄養関連の健康学などです。その他に大学内ではスポーツレジャー学科の学科長、スポーツウェルネス研究センターのセンター長で、大学外では地域体育会の理事、各種の学会の理事などを行っています。

- ④ 一番の違いは学生のエネルギーだと思います。日本の学生は遠慮がちですが、韓国の学生は積極的です。韓国の大学は行政が速いですが、その分、失敗も多いと思います。もし韓国人で韓国で大学の先生になりたいのであれば
- ⑤ 日本での考え方を結構捨てないと辛くなると思います。できれば日本で就職することをお勧めします。私は日本でも10年ぐらい大学の教員をしてから韓国にいきましたが、日本の方が楽しかったです。



レブランフォン Le Vu Lan Phuong, Ph.D.
(2015~2016 奨学生/ベトナム)

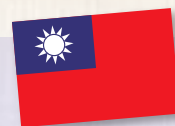


- ① カントー技術大学(ベトナム)
- ② 食品科学・生物工学研究所、生物化学部長 勤務期間は3年。
- ③ 機能性食品、研究手法、一般遺伝学を担当しています。そのほかいくつかの研究プロジェクトに属し、学部生の論文も指導しています。

- ④ この大学では工学分野の実務的なスキルアップを目指した教育を行っています。ほかの大学と一概に比べることはできませんが、私の卒業した東京大学では知識を深める教育を受けたのに対して、この大学では将来の仕事のための技術を身に着けることを教わっているように思います。この大学はまだ小規模で、東大のように大学院がありません。設備も東大のように充実していません。



劉 姿汝 Liu Tsu Zu, Ph.D.
(1999~2001 奨学生／台湾)



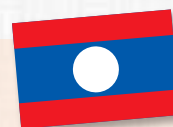
- ① 中興大学 法政学院 法律学科(台湾台中)
- ② 今は准教授 (Associate Professor) キャリア年数は17年目に入りました。
- ③ 現在担当の授業は、公正取引法、民法債権編、消費者保護法が主要です。学部と大学院両方の授業をやっています。大学院には研究者コースと社会人コースがあります。社会人コースは法学専門ではない、社会人のエリートが多く、教える方の私も勉強になります。
学校以外の仕事について、現在台中市の消費者委員会委員と国家賠償委員会委員を担当しています。また、

専攻は競争法(反トラスト法)であり、よく台湾の公正取引委員会から依頼される仕事をします(研究計画の参与、座談会やシンポジウムの参加など)。

- ④ 日本では、大学の教員は研究と教育に専念できると感じます。台湾の場合、いろいろな雑務をしなければいけません。具体的は、様々な入学試験に関する仕事(面接、筆記試験、書類審査)や、教員個人と学部で3~5年に1回評価制度があり、かなりプレッシャーがあります。それに少子化が日々深刻化していますので学生募集のイベントにも参加しなければいけません。



オンパンダラ パンパキット Onphanhdala Phanhpakit, Ph.D.
(2005~2008 奨学生／ラオス)

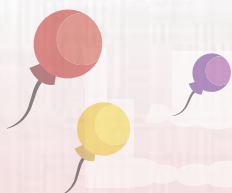


- ① ラオス国立大学 ラオス日本センター／経済経営学部(ラオス)
- ② 2011年4月よりラオス国立大学に勤務、キャリア年数：9年。1年目は、経済経営学部の経済学科に所属した後に、2012年5月から2015年7月にかけて、学部の大学院部門長に抜擢され、修士課程の教育開発に従事した。その間は、ラオス日本センターの非常勤講師を兼任。2015年7月から2019年5月にかけて、ラオス日本センターに配属され、副所長に就任し、日本との架け橋に尽力した。その間は、逆に経済経営学部の非常勤講師を兼任。2019年6月からラオス国家経済研究所に転勤し、企業開発・経済統合政策研究センターの副所長に就任。引き続き、経済経営学部の非常勤講師を兼任。
- ③ 主に、大学院コースの研修手法、財政学、プロジェクト・マネジメントなどを担当し、多数の修士課程の論文指導を行う。日本の大学と違い、ラオスの大学では学期ごとにゼミを毎週行わず、たとえば経済学科の規定では、担当教官が院生と臨機応変に日時を指定し、12回以上指導することになっている。
ラオスに帰国後も、神戸大学や山口大学に客員・招待

講師として毎年のように日本に出張し、日本の大学・研究機関との交流を継続中。そして、アセアンの様々な大学との学術・研究の交流も拡大中。また、ラオス商工会議所のThink-Tank委員に選出され、産学官の連携に力を入れている。

学生、教員同士、社会などにインパクトのある学術研究成果、意識改革、強い志をモットーに、日本に居た頃と変わらずに職人のプライド、礼儀正しさ、責任感を大切に日々努力と工夫をしている。

- ④ ラオスの大学・大学院コースには主に社会人(特に公務員)の比重が大きく、学部生の進学が少ない特徴があり、多彩な大学院生のバックグラウンドを基に幅広い分野の知識・経験が急速に吸収・蓄積できる。この大きなネットワークによりラオスの開発に関する総合的な研究テーマに取り組むことができるメリットがある。研究環境や研究費は日本と比べものにならないほど少ないが、ラオスの特徴として、専門性よりもジェネラリストを大事にする。また、一ラオスの経済学者として政府との距離が近く、研究成果が政策提言につながる可能性が高い長所をもつ。





ニック ラブ Nick Love
(2018～2019 JMSA奨学生／アメリカ)

アメリカミシガン州出身。
ノースカロライナ大学で生物学部を卒業し、現在スタンフォード大学の医学生。

日本語医学用語記憶術と語呂合わせ

はじめに

世界中の医師、看護師、医学生は解剖学上の身体構造、鑑別診断、患者ケアのアルゴリズムを含め、医療の様々な場面での記憶のために、記憶術を駆使している。しかしながら記憶術は各言語の言語学的特徴の影響を受ける。これもまた興味深いことである。つまり英語、または日本語記憶術はそれぞれ他の言語には翻訳しにくい。またその逆も同じである。

私は医学生だが、日本語と医学用語記憶術に興味を持ち、2018年のJMSAプロジェクトに日本での医学用語記憶術の使われ方の調査を提案した。

2018年4月、私は幸運にもHonjo-JMSA奨学金を受賞することとなり、2018年JMSA年次大会に出席するためにすぐさまサンフランシスコからニューヨーク行きのフライトを予約した。この奨学金の出資者に感謝しながら、このJMSAプロジェクトの研究を模索し始めた。

年次大会の場で私は日本でトレーニングを受けた、または日本語に堪能な医師にお会いすることができた。そこで私は彼らに医学部のときに習った医学用語記憶術で覚えているものがあったら教えてほしいと尋ねた。この事例調査によると「ツナコロッケ」が日本医学用語記憶術の中でポピュラーなものだった。これは体の中心に近い方から末梢へ枝分かれする鎖骨下動脈の名称の順番であった。日本語で「語呂合わせ」といわれるもので、日本語の言葉遊びの一つだということを教わった。

年次大会の後、私はJMSAが指定した私の指導、メンター役である島田悠一先生にお会いした。島田先生と私は一緒に「ツナコロッケ」以外の医学用語語呂合わせをいくつか取り上げ、分析し翻訳し、日本語を理解しない人に説明できるようにした。私たちの願いは、日英医学界での文化的

言語学的交流を促進することだった。ここにこのプロジェクトの結果を簡単に紹介しよう。

日本医学用語の語呂合わせと 英語の略語との比較

英語の医学用語における有名な記憶のための略語(頭字語)は、“ABC”の反復である。例えば、救急医療の手順におけるAirway(空路)、Breathing(呼吸)、Compression(圧迫)/Circulation(循環)。黒色腫の警告サインである“Asymmetry(非対称)、Border irregularity(不規則な境界)、Color changes(変色)、Diameter(直径)、Evolving(展開)/changing over time(経時変化)。そしてアニオンギャップアシドーシス増加の潜在的原因における“MUDPILES”は“Methanol(メタノール)、Uremia(尿毒症)、Diabetic ketoacidosis(糖尿病性酸性血症)、Paraldehyde(パラアルデヒド)、Isoniazid(イソニアジド)、Lactic acidosis(乳酸性アシドーシス)、Ethylene glycol(エチレングリコール)、Salicylates(サリチル酸誘導体)である。

注意すべきは、英語の略語(頭字語)記憶術はアルファベットによるものである。頭字語の各文字は、関連する用語の最初の文字である。これは英語が文字を組み合わせて音節を作る構造であるためである。一方日本語は音節がひとつひとつのかなの中に入りており、その組み合わせで単語ができていく。厳密にいうと日本語にはアルファベットはなく、50の音節文字がある。

日本語を話さない人にとって、英語と日本語のこの違いは理解しにくい。私はよく「やま(山)」という単語を例にして説明する。「やま」は母音で終わる二つの音節の組み合わせであり、二つのかな「や」と「ま」で表記される。ひとつのかなの中に子音と母音または母音のみの完全な音(音節)

がある。このため日本語は膠着語と呼ばれる。一方英語は文字をばらばらにすると音が失われる。(T-R-E-Eの発音は一音節である。)

さらに、日本語は英語に比べて音節の種類が少ない。(英語が10,000を超えところ、日本語は100以下)そしてほとんどすべての日本語の音節は母音で終わる。母音重視、かなの数が少ない、といった日本語の言語学上の制限のため、「語呂合わせ」といわれる記憶術が発展したのである。

「ツナコロッケ」を考えてみよう。面白いことに「ツナコロッケ」はもともと日本語ではない。「ツナ」はスペイン語の"atún"から派生した英語の"tuna"である。(「ツナ」は日本語では「まぐろ」である。)そして「コロッケ」はおそらくフランス語の"croquet"から派生した"to crunch"である。「ツナコロッケ」は借用語であり、日本語ではないので、慣例によりカタカナで表記される。一つ一つのは母音で終わる音節でできている。ただし小さい「ツ」は「ロ」と「ケ」の間に挿入された短い休止である。そして音訳は「tsu-na-ko-ro-(小休止)-kay」となる。

「ツナコロッケ」の医学用語記憶術としての役割は、最初の4つの日本語の音節が、体の中心に近い方から末梢へ枝分かれする鎖骨下動脈の名称の各単語の最初の音節と

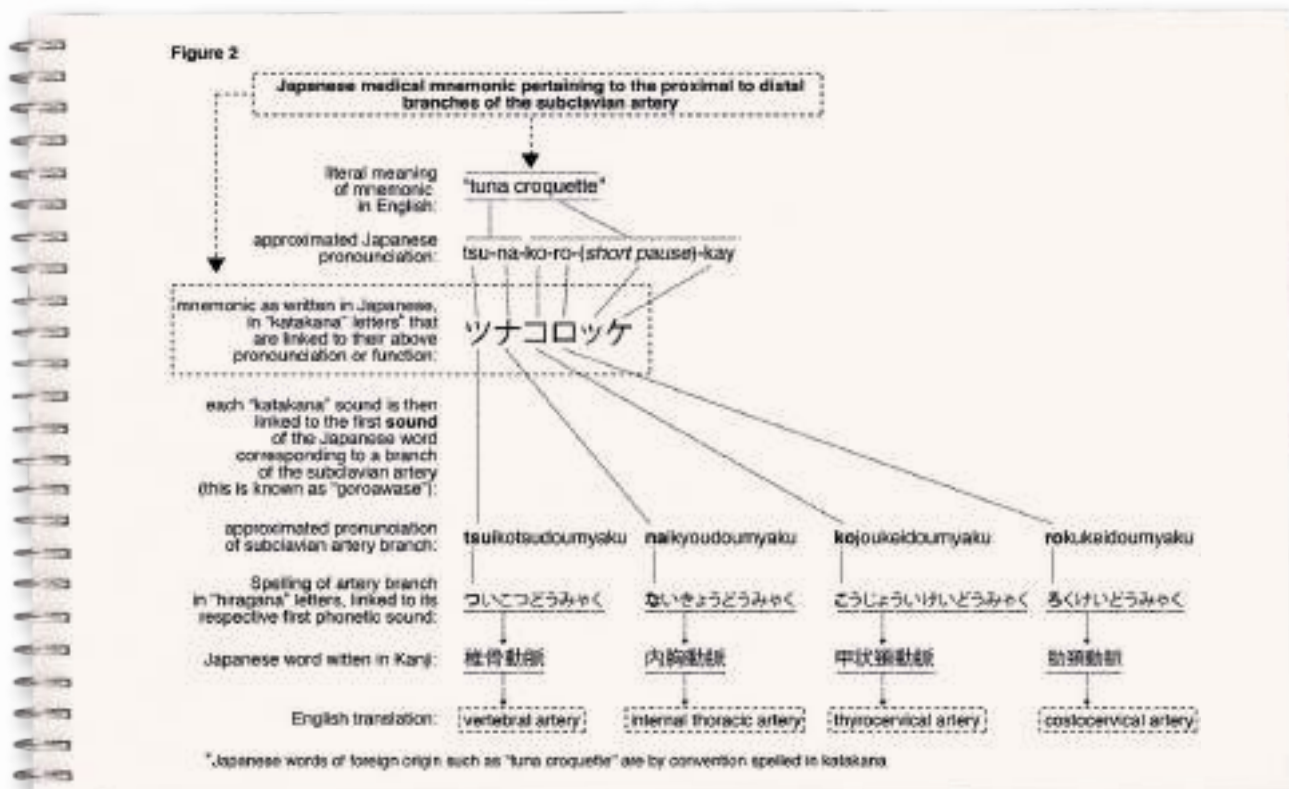
同じだからである。(下の図に示す)

「ツ」→「ついこつどうみゃく」(椎骨動脈)、「ナ」→「ないきょうどうみゃく」(内胸動脈)、「コ」→「こうじょうけいどうみゃく」(甲状腺動脈)、「ロ」→「ろくけいどうみゃく」(肋頸動脈)

このように母音で終わる音節が別の言葉を暗示するのが語呂合わせであり、記憶術のひとつのタイプである。面白いことにこれは日本語に固有の性質、つまりほとんどの単語が母音で終わり、比較的音節の種類が少ない膠着語であるために、語呂合わせが生まれやすい。日本語には同じ音節で始まる単語が多いからである。これは英語が同じ文字を繰り返し使うことと似ている。

実際にもっとたくさんの医学用語語呂合わせがインターネットで検索できる。しかし語呂合わせはもともと日本で古くから、電話番号や番地のような数字の羅列を記憶する方法としてよく知られてきた。

医学教育において、日本語の語呂合わせ記憶術は特に興味深い。なぜなら日本語にだけ通用する記憶術であり、英語に翻訳すると意味をなさないからである。語呂合わせは言語がいかにか創造的制約を生むのか、また世界共通の医学用語記憶術の作成に興味を持つ人にとって好奇心をくすぐるものであり、世界医療への重要なひとつの手段である。



夢に向かって一歩ずつ ～アフリカに義肢装具を届ける～



アドゥアヨム アヘゴ アクエテビ Aduayom-Ahego Akouetevi, Ph.D.
(2015～2018 外国人留学生プログラム奨学生/トーゴ)

西アフリカトーゴ出身。
トーゴと日本で義肢装具技術を学び、2018年新潟医療福祉大学より博士号を授与される。
現在は株式会社ドリームジービー（大阪）で研究開発に従事しながら、
アフリカに義肢装具を届ける活動をしている。

私は2015年から2018年まで本庄国際奨学金をいただいて新潟医療福祉大学の博士課程で勉強しました。
私の専門は、股関節の中心位置の評価に基づく運動の解析、筋活動、歩行解析装置の性能評価、
そして義肢装具の開発とアフリカのサハラ砂漠より南の地域（サブサハラ）の教育です。

アフリカにおける義肢装具のニーズについて

2050年までに義肢装具や支援機器を必要とする人は世界中で20億人を超え、わずか10人に一人しか適切な福祉用具を利用できていないのが現状であります。世界中に支援機器を必要とする人々は6億5,000万人程度（うち80％が発展途上国に分布）存在しております。サブサハラアフリカの障害者人口はおよそ7,800万人を超えているが、多くの人々に義足など福祉用具が行き渡っていない。例として、サブサハラアフリカであるガーナでは障害者人口のわずか5％しかこのようなケアを受けられずにいる。下肢切断および下肢欠損に至る理由としては交通事故などによる外傷、糖尿病などの疾患、または先天的変形などが原因としてあります。このために患者は移動に制限があり恥辱に満ちた長い人生を余儀なくされます。欠損患者は良い義肢装具がなければ、社会から疎外され、厄介者とされ、孤独で、究極的には貧困に陥り、その結果家族や社会、国に莫大な社会的、経済的コストを負担させることになります。四肢欠損の患者を社会復帰させることはとても大切なことです。障害を持つ患者には義肢が必要ですが、入手できる人は限られています。最新のガーナの研究によると、ガーナにおいて義肢装具への需要は存在しているが、義肢装具センター、義肢装具教育、義肢装具士が不足しているために、供給できていないことが明らかとなっています。このようにガーナなどの発展途上国における義肢装具の発展を

促すためには、義肢装具などの福祉機器を必要とする人々に隔たりなく提供できる試みが考慮されなければなりません。そのひとつとして2016年ガーナに義肢装具のサテライトオフィスが立ち上がりました。



笑顔を取り戻す

四肢欠損患者の願いは起立、歩行の能力を取り戻すことです。患者に義足を提供するために、日本の義肢の会社から中古の義肢部品を集めました。これらの部品をリサイクルしてガーナの切断者のリハビリで使うことができました。義足のお陰で患者は立つことができ、歩くことができ、普通の生活に戻るようになりました。



ガーナ初のシリコンの義指制作

発展途上国では指を失った患者のリハビリは現地の装具士にとってまだ難しいことです。義肢装具士の実習施設や必要な材料が足りないからです。たとえば、発展途上国の義肢装具士学校の教育プログラムでは、シリコンの技術はまだ教えられていません。義指は患者の肌の色と合わせなければいけないので、外見上や美容上の工夫が患者の生活を左右します。複数の指を失った患者に対して、シリコンに化粧を施した義指を装着するリハビリをガーナで初めて試しました。欠損患者は、希望を取り戻し、居心地のいい社会生活に戻ることを常に切望しています。



2020年東京パラリンピックに向けて： トーゴ初のパラアスリートの義足制作

トーゴはこれまでスポーツ義足を装着した選手をパラリンピックに送り出したことがありません。公益社団法人日本義肢装具士協会の協力を得て、オキノスポーツ義肢装具さんと共同して東京でプロジェクトを立ち上げています。2019年4月にトーゴで初めて肢欠損の選手のために義肢を作りました。彼は今新しい義足を装着してトレーニングに励んでいます。2020年東京パラリンピック大会にトーゴ代表として出場することを目指しています。



今後の展望

- 中古の義肢部品の有用性や品質をチェックする検査道具を作る。
- 日本の義肢会社から中古の義肢を大規模に集められる仕組みを作る。
- 国際機関やNGOと協力する。
- 地方在住の障者にも義肢装具を提供できるよう遠隔地にサテライトセンターを設立する。
- サハラ砂漠以南地域に最新の義肢装具技術が届くように、すぐれた技術者集団を育てる。
- ガーナには英語の、トーゴにはフランス語の義肢装具の研修所を設立する。

びっくり! でもとても名誉なこと

ある日「アフリカントラベラー」というテレビ番組の収録のために、千原せいじさんと新潟テレビが私に会いに大学にやってきました。新潟に住んでいるアフリカ人を探すというテレビ番組で私が選ばれたようです。2018年1月13日新潟BSNで放映されました。



最後に

日本で学んだことを母国に持ち帰って夢を実現しようとする留学生を支援してくださる本庄国際奨学財団に心から感謝しています。私は日本とアフリカの懸け橋となってアフリカにリハビリテーション、教育、研究を普及させるためにこれからも努力します。新しいことを学ぶためには新しい世界に心を開く、夢は足元にあります。

一生をかける仕事 行動分析士として



富樫 耕平 Kohei Togashi, Ph.D.
(2018～2019 海外留学プログラム奨学生／日本)

埼玉県出身。
発達障害を持つ人々とそのご家族が積極的に社会に参加できる社会づくりを目指し、日本やアメリカで学び、臨床心理士、認定行動分析士の資格を取得。
2019年4月ウエスタン・ミシガン大学で行動分析学の博士号を取得し、
現在はTherapeutic Pathways The Kendall Centersで障害を持つ人々へのサービスを提供している。

発達障がい支援の現状

技術の進歩などに伴い、私たちの生活は便利で快適なものになりました。しかし、日本における、障がいをもった方々やそのご家族に対する効果的な治療や支援は、未だ、十分であるとは言えません。たとえば、日本では、発達障がいをもつ子どもの支援の重要性が法律で位置づけられ、支援体制の整備が進められています。しかし、科学的な根拠に基づく支援については、その基盤整備の研究が着手された段階であり(丹波、2001)、発達障がい者を支援する手法が不足しています(小林、2012)。事実、現在、日本で行われている発達障がいに対する支援は、非科学的なものが多く、目に見えた変化や効果が得られないまま、何年も発達支援施設や病院等に通い続けていらっしゃる方々が多くいらっしゃいます。一方、米国では、1997年に「個人障害支援法」の改正が行われ、その後、科学的根拠に基づいた、具体的な支援方法の普及が進められています。その一例として、米国では、応用行動分析(Applied Behavior Analysis:以下ABA)が自閉症の第一選択治療として使用され、1998年には行動分析士の資格化が開始されました。近年では、ABAの需要の高まりと普及に伴い、31州(2019年4月現在)が、ABAの実践を行う場合、免許の取得を法律で義務付けています。加えて、46州で応用行動分析を使った自閉症支援の費用が保険によって負担されることが法律で定められています(2017年6月現在)。

私が生涯をかけて達成したいこと

私の夢は、障がいを持つ方々とそのご家族にとって意味が

あり、さらに、客観的効果が得られる治療・支援方法を日本で普及させることです。この目標を達成するためのひとつの方法として、日本における正しいABAの理解と普及を目指しています。「障がいをもつ方々やご家族にとって意味のあることを支援目標とすること」と、「継続的で客観的な治療効果の評価」は、ABAに欠かせない要素です(Baer, Wolf, & Risley, 1986)。しかし、このような要素は、今日、日本で普及している支援方法の多くには見られない、あるいは、不十分です。また、残念ながら日本で普及しているABAは、本来のABAではないことが珍しくありません。

アメリカ留学で学んだことと研究

私は、自分自身のABAに関する専門知識とスキルを高めるため、日本で勤務をしながら勉強をし、2014年にアメリカの行動分析士の資格(Board Certified Behavior Analyst)を取得しました。その後、2016年にウエスタン・ミシガン大学(Western Michigan University:以下、WMU)の博士課程でDr. Richard Malottの指導のもと、フルブライト奨学生として留学を開始しました。WMUでは、自閉症の子ども達の支援方法に加え、行動の原理に基づいた効果的なスタッフ・トレーニングの方法や、組織システムの分析とデザインについて学びました。

博士論文の研究では、地元の小学校で、活動や場所の移行時に起こる「寝ころび」や「泣き叫び」等の問題行動を減らし、子ども達がスムーズに移行ができることを目的とした支援を行いました。加えて、現在、行動分析の分野で幅広く使

用されている研究方法は、実践現場での使用が難しく、実践者の大半は研究を行っていません (Malott, 2018)。そのため、私の研究のなかでは、実践者が使用しやすい科学的研究モデルについて検討を行いました。さらに、私がWMUを卒業した後もクラスの先生方が、私がデザインした支援方法を正確に実施し、定期的な効果の評価も継続できるよう、クラスにあわせたシステムのデザインと導入を行いました。

卒業後の予定と計画

WMU卒業後は、カルフォルニアにある自閉症センターで Dr. Jane Howard の指導のもと、およそ一年間、実践経験を積む予定です。その後、中央大学で非常勤講師として勤務をします。さらに、帰国後は、ABAを使った支援と治療の普及を図るため、様々な分野の専門家の方々と一緒に活動を行いたいと考えております。たとえば、企業の新人研修やスタッフ・トレーニングに行動分析 (行動の科学) を取り入れることで、効果的かつ、効率的に新しいスキルをスタッフに教授することができます。幅広い分野の専門家やリーダーと連携を行い、目に見える結果を出していくことで、ABAの有効性や汎用性の高さについて知っていただきたいと思います。

私は、これまで本庄国際奨学財団の皆様をはじめ、数多くの方々に助けていただきました。また、発達障がいの診断を受けた子ども達やそのご家族には、生涯の目標を与えていただきました。帰国後は、アメリカで学んだ知識やスキルを使い、私にできる限りの恩返しをしていきたいと考えております。



ウエスタン・ミシガン大学



カル＝ヘブン・トレイル・セスキセンテニアル・ステート・パーク
(ミシガン州サウスヘブンとミシガン州カラマズー市のすぐ西の地点まで)
(33.5マイル走った鉄道トレイル)



ウエスタン・ミシガン大学の丘の上から見たカラマズーの町の景色

1年間の活動

2018年4月～2019年3月

① 博士・修士論文発表会

2018年5月20日(日)

2018年3月に学位を取得した4名による
博士・修士論文発表会を開催しました。



久野 恭平



ラウラ リリアナ アブリル ガルシア



アドゥアヨム アヘゴ アクエテビ



喜多村 佳委

② 北区赤羽マラソン

2018年6月9日(土)

北区赤羽マラソンの20キロリレー
(5キロ×4人)に3チームが参加しました。
結果は3チームとも見事完走です。



③ 静岡研修旅行

2018年6月15日(金)～16日(土)

伊藤園相良工場、中央研究所、浜岡工場、
ホテイフーズ富士川工場(ペットボトル飲料製造)を
見学しました。



4 第13回HISFワークショップ

2018年7月29日(日)

「金属触媒が『ものづくり』にはたす役割」

講師：カニヴァ スティーブン キャロ



5 東北水ボラ研修旅行

2018年9月29日(土)～30日(日)

オハイオ大学、岩手県立大学と共同で

東日本大震災復興支援ボランティア活動を行いました。



6 食と健康研究成果報告会

2018年11月8日(木)

食と健康研究助成金受賞者による
研究成果報告会を開催しました。



山田 晃一先生



木下 かほり先生



海野 けい子先生



清水 雅仁先生



坂本 隆子先生



岸本 良美先生



奥村 仙示先生



馬場 吉武 (伊藤園中央研究所)

7 第14回HISFワークショップ

2018年11月10日(土)

「量子通信、量子コンピューターと暗号技術」

講師：バグス サントソ



8 北区赤羽マラソン

2018年12月8日(土)

北区赤羽マラソンの20キロリレー
(5キロ×4人)に3チームが参加しました。
今回も3チームとも見事完走です。



9 忘年会

2018年12月20日(木)

毎年恒例の大相撲初場所マス席が当たると当地クイズは、
京都大学の李豪さん作成の「中国クイズ」でした。
中国のトリビアに会場は盛り上がりしました。



10 歓送迎会 および研究助成金授賞式

2019年3月27日(水)

2019年4月から仲間になる新しい奨学生への歓迎会、
2019年3月までに卒業された奨学生の送別会
および食と健康助成金授賞式を開催しました。



卒業生



新入生

すでに帰国された
卒業生からの
ビデオメッセージ



オ デヒョンさん作家デビュー



オ デヒョンさん(韓国出身19期生)は東京大学で天文学の博士号を取得し、現在韓国の気象庁にお勤めですが、2019年秋にSF短編小説で作家デビューを果たされました。タイトルは「偉大なる沈黙」。以前から趣味でフィクションを執筆されていましたが、このたび見事な文壇デビューです。韓国語版のみですが、日本語、英語の翻訳が出版されることを期待しています。

オ デヒョン Oh Daehyeon, Ph.D.
(2015~2016 外国人留学生プログラム/韓国)



学生寮の運営を開始しました

2018年4月より、学生寮を開寮しました。ゲストルームもありますので、本庄財団同窓生の方の短期宿泊にもぜひご利用ください。詳しくはホームページまたは事務局へお気軽にお問い合わせください。

学生寮概要

名称 春風荘 (しゅんぷうそう)
住所 東京都北区王子本町2-16-2 (JR・東京メトロ 王子駅より徒歩11分)
寮室 8室 (1階:男性4室/2階:女性4室)



Topic 『京都』にも学生寮ができます

京都にも古民家再生の学生寮を造っています。こちらにもゲストルームを用意しますので、京都旅行の際にはぜひご利用ください。

2020年4月オープン予定

学生寮概要

名称 未定
住所 京都市上京区堀川通中立売下ル
寮室 6室

春風荘の四季

春風荘の日本庭園には年間を通じて様々な花が咲き乱れます。美しい日本の四季を楽しみに来てください。



春風寄席

春風荘ではご近所の方々を招待して「春風寄席」を開催しています。留学生やご近所同士の交流の場になれば幸いです。



本庄国際奨学財団22年の軌跡

HISF Journey of 22 years

1期生から22期生まで思い出の写真をまとめました。

同期の友人を想い出すきっかけになれば幸いです。

Here we've collected the pictures from 1997-2018.

It's our pleasure if it results to remember the old days with your friends.



1997

11月4日

懇親会にて
役員と歓談

November 4 With Board of directors of HISF



1998

6月19日

静岡研修旅行

June 19 The Shizuoka Trip

1999

12月10日

忘年会にて歓談



December 10 The Year-End Party

2000

12月13日

忘年会にて



December 13 The Year-End Party

2001

6月7日

静岡研修旅行



June 7 The Shizuoka Trip



2002

9月29日

食事交流会

September 29 International Food Exchange

2003

3月28日

照子理事長と
歓送迎会にて



March 28

With president Honjo at the Annual Party

2004

3月4日

韓国にて
同窓会開催



March 4

The reunion at South Korea

2005

12月27日

忘年会にて



December 27

The Year-End Party

2006

7月16日

筑波山登山



July 16

At Mt. Tsukuba

2007

7月15日

福島県南会津
サマーキャンプ



July 15

Fukushima Minami Aizu Summer Camp

2008

12月24日

本庄大理事
と忘年会にて



December 24

With the director Daisuke Honjo
at the Year-End Party

2009

9月12日

京都で
狂言を体験



September 12

Kyogen experience at Kyoto

2010

10月26日

銀座で
財団OB会



October 26

Reunion at Ginza

2011

8月20日

気仙沼で
東日本大震災
復興ボランティア



August 20

Volunteer work in Kesen-numa,
the devastating area by 3.11 Great Earthquake

2012

9月15日

京都旅行



September 15

At Kyoto Tour

2013

5月18日

陸前高田市にて
水ボラ



May 18

Water distribution volunteering
at Rikuzen Takada City

2014

10月18日

上海OB会開催



October 18

The reunion at Shanghai, China

2015

5月24日

博士論文
発表会にて



May 24

At the Dissertation Presentation Program

2016

7月16日

国際復興
フォーラム



July 16

At the International Reconstruction Forum

2017

8月19日

20周年記念
国際シンポジウム



August 19

HISF 20th Anniversary
International Symposium

2018

7月29日

第13回
ワークショップ



July 29

At 13th HISF Workshop



Greetings from the President

President

Hachiro Honjo

Greetings to all scholarship students and the graduates of the Honjo International Scholarship Foundation.

It has been 23 years since my brother, Masanori, and I established the Honjo Foundation in 1996. I have worked with the foundation throughout this time as one of the directors, and just last year, I succeeded as President from our former President, Teruko Honjo. I would like to express my sincere gratitude for all the support and encouragement I have received from so many people over the years.

Japan has changed dramatically over the past two decades. Also, during this period, many foreign students have overcome various difficulties to come to Japan. These students worked very hard in their studies and researches.

When looking back, foreign students came from only four countries in the first year, but gradually increased to more than 10 countries every year as scholarships became granted to students. As of last year, the number of countries grew to 79. The total number of students also increased to 577 students, of which 418 were foreign students and 159 were Japanese students.

I believe that all people, countries, and cultures are equally honorable. I intend to continue granting scholarships to as many students as possible from various countries. It will be my utmost pleasure if our foundation can assist in achieving this.

In addition, I would like to ask everyone to come together and form harmonious relationships with each other. I believe

this is a shortcut that bridges the differences in the thinking and culture between Japan and other countries.

In the same way as an organization that experiences various turning points and becomes strong like a bamboo, the foundation is making its mark in history while responding to the changes in the current times. The foundation celebrated its 20th anniversary in 2017 and held an international symposium to rekindle the relationships with everyone. Now, we are taking our first steps toward the 30th anniversary.

Last year, we opened a dormitory, which has been a goal of ours for a long time. The dormitory has been well received by the students who are living there as well as the graduates who are living abroad that use it during their business trips to Japan. I hope new friendships will be formed among the scholarship students at the dormitory.

The name of the Japanese era has changed to Reiwa this year. In line with the start of this new era, a new scholarship program has been established for Japanese high school students. We will strive to develop ambitious human resources to the best of our abilities in response to the needs of the times.

Through these experiences and challenges, I would like to further expand the circle that has been created by the Honjo Foundation over the years. I ask for your continued support. Thank you.

winter 2019

Overview of the foundation

[Name] Honjo International Scholarship Foundation

[Overseeing Authority] Cabinet Office, Government of Japan

[Date of Establishment] December 25, 1996

[President] Hachiro Honjo

[Purpose]

Honjo International Scholarship Foundation has been established to support outstanding students and researchers. To help them learn advanced technologies and improve their good intensions will serve as a bridge connecting Japan with the rest of the world in culture and mutual friendships.

[Address] 1-14-9 Tomigaya Shibuya-ku Tokyo 151-0063 JAPAN

[TEL] 03-3468-2214

[FAX] 03-3468-2606

[E-mail] info@hisf.or.jp

[URL] <https://www.hisf.or.jp>

Guideline for Scholarship and Research Fellowship in 2019~2020

Scholarship for foreign students studying in Japanese graduate school (Fall scholarship) **NEW**

[Application period]	April 1st, 2020~April 30th, 2020 (scheduled)
[Number of Scholarships available]	A few
[Applicants]	This scholarship is open to foreign students who study or plan to study in Japanese graduate school for doctoral or master's degree. The scholarship period starts at September or October 2020.

Scholarship for Japanese International Students

[Application period]	February 1st, 2020~April 30th, 2020 (scheduled)
[Number of Scholarships available]	A few
[Applicants]	This scholarship is open to Japanese graduate students who study or plan to study in other countries than Japan for doctoral or master's degree. The scholarship period starts at September or October 2020.

Scholarship for Japanese High School Students **NEW**

[Application period]	December 20th, 2019~February 28th, 2020
[Number of Scholarships available]	10
[Applicants]	We support high school students with financial difficulty to have higher education at university. The scholarship period starts at April 2020.

Scholarship for foreign students studying in Japanese graduate school (Spring scholarship)

[Application period]	September 1st, 2020~October 30th, 2020 (scheduled)
[Number of Scholarships available]	15~20
[Applicants]	This scholarship is open to foreign students who study or plan to study in Japanese graduate school for doctoral or master's degree. The scholarship period starts at April 2020.

Scholarship for Japanese Domestic Students

[Application period]	September 1st, 2020~October 30th, 2020 (scheduled)
[Number of Scholarships available]	A few
[Applicants]	This scholarship is open to Japanese students who study or plan to study in Japanese graduate school for doctoral or master's degree. The scholarship period starts at April 2021.

Food and Health Research Fellowship

[Application period]	September 1st, 2020~October 15th, 2020 (scheduled)
[Number of Scholarships available]	Total of ten million JPY will be divided by approximately five researchers.
[Applicants]	We support research to clarify the efficiency of food or ingredients of food in order to maintain good health by means of experimentation on human subjects or by various other substitution methods. The research grant is provided from April 2020.

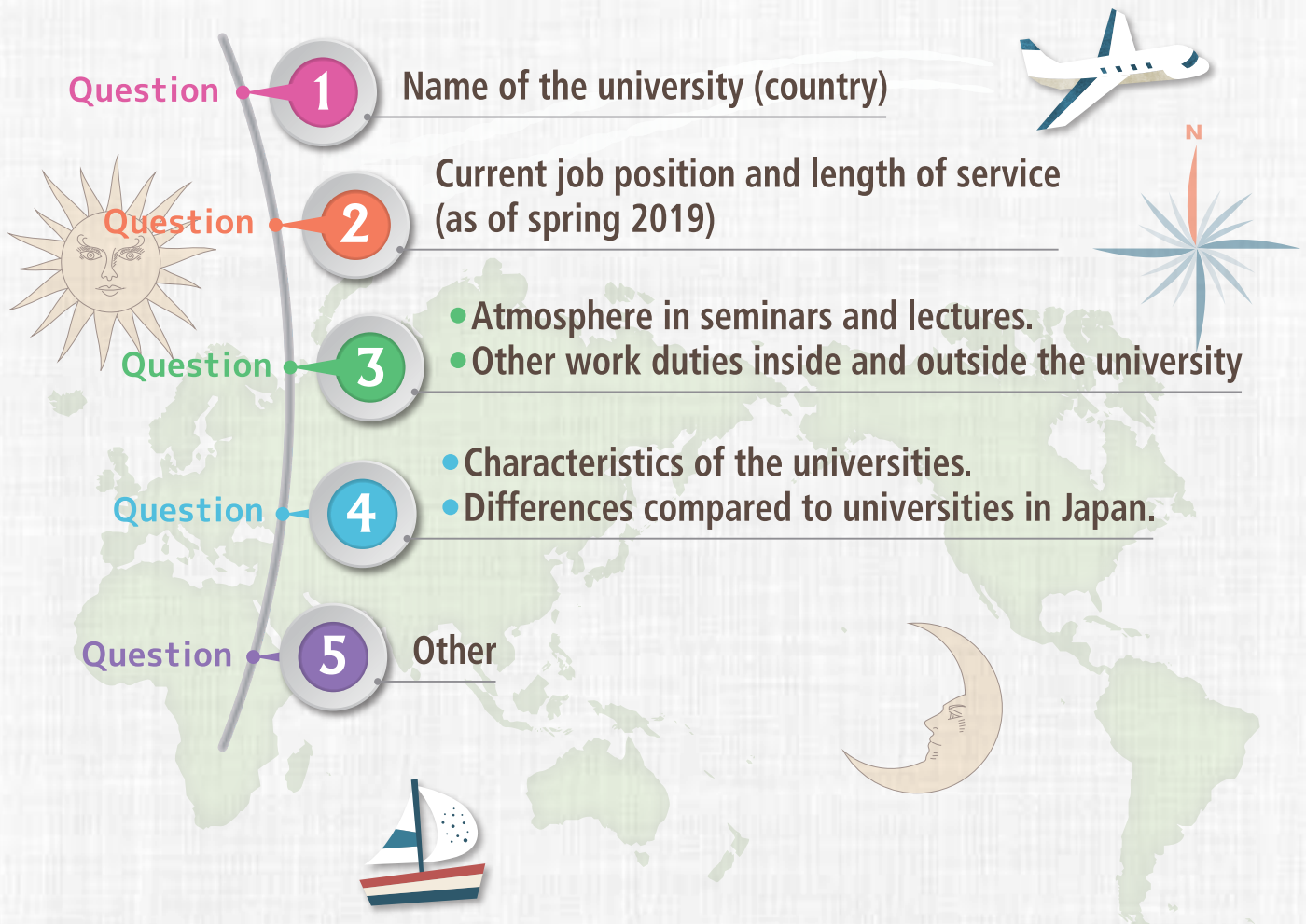
※We will announce the fixed schedule and details on our web site. The application is through web internet system.



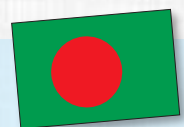
Information about universities around the world



大学に勤めている先輩から各国の大学情報をいただきました。



Md. Nasif Ahsan, Ph.D.
(2015~2017 scholarship student / Bangladesh)



- 1 I work as a full-time faculty member in Economics Discipline under Social Science School of Khulna University, Bangladesh.
- 2 I have been working in this university since last 14 years and currently I am playing my role as a Professor and Head of Economics Discipline.
- 3 Though I belong to Economics as a subject, over the last decade I have gradually focused on different issues of climate change and disaster risk reduction. It is because the region I live in Bangladesh is a coastal zone and very prone to different natural hazards, especially to tropical cyclones. Currently I conduct two courses on disaster management and climate change- one in undergraduate level and one in post-graduate level. In addition, I conduct one practical course on quantitative techniques in every semester. Being the head of Economics Discipline, I am

endowed with all the academic responsibilities such as monitoring the class routine, ensuring the coordination of classes, and arranging the semester final examinations.

- 4 Khulna University is a public university in Bangladesh, which offers 29 courses (i.e., Subjects) under seven different schools for nearly seven thousand students. Within country, this university possesses a unique feature of its academic calendar- in an academic year, first semester starts on 1st January and ends on 30th June; while the second semester starts on 1st July and ends on 31st December. Likewise Japanese universities, my university is not affluent and therefore, many times we cannot avail all the required logistics for a smooth academia. An interesting feature of my university is that nearly 17 percent of its current faculty members have had either their Masters or Doctoral degree from Japan.



Yupana Wiwattanakantang, Ph.D.
(1998~2000 scholarship student / Thailand)



- 1 National University of Singapore (Singapore)
I have been working in this university since last 14 years
- 2 Professor at the NUS Business School, 10 years.
- 3 I studied at Hitotsubashi University. After graduating, I taught at the Institute of Economic Research, Hitotsubashi University. At first, I gave lectures in the teaching style of Japanese universities. This means that I spoke unilaterally to the students. However, because I was not given a good evaluation in that style, I changed the style. Now, I use a lot of case studies, asking questions and making the students think about their answers. I do not teach anything. My assistant counts the number of times that each student speaks in class, and this is used to evaluate the students. This is the American style. Although a lot of preparation for each class is required, I am given good

evaluations in this style. I used to stay in my office most of the time when I was in Hitotsubashi, but now I try to go out and meet people.

- 4 The Singapore government puts a lot of effort into education. They headhunt excellent professors from all over the world. Salaries are determined through negotiations based on the competence of each applicant. The employment contract is renewed every 3 years, but most professors are let go after 3 years. The evaluation system is based on papers published, but it is hard to receive a good evaluation unless the papers are published in top journals. The 3 pillars of the professor evaluations are education, research, and contribution to the university (impact on society).



Oh Taewoong, Ph.D.
(2001~2003 scholarship student / South Korea)



- 1 Name of the university: Yong-In University (South Korea)
- 2 Associate professor, 4th year.
- 3 I mainly teach sports nutrition and exercise physiology classes, as well as seminars in health studies related to exercise and nutrition. In addition, I am chairman of the Department of Sport & Leisure Studies and the head of the university's Sports & Wellness Research Center. Outside the university, I am a board member of the regional athletics association and other academic society.

- 4 The biggest difference is the energy of the students. Japanese students are reserved while Korean students are proactive. The administration at Korean universities respond quickly, but I feel that this also results in a lot of mistakes.
- 5 If you are a Korean person wanting to teach at a Korean university, it will be difficult unless you give up the Japanese way of thinking. If possible, I recommend that you find a job in Japan. I have worked at a university in Japan for 10 years before going back to Korea, and I liked it better in Japan.



Le Vu Lan Phuong, Ph.D.
(2015~2016 scholarship student / Vietnam)

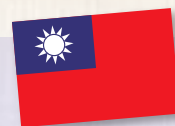


- 1 Can Tho University of Technology (Vietnam)
- 2 My position now is Head of Department of Biological Chemistry, Faculty of Food Technology and Biotechnology. I have been working in this university for about 3 years.
- 3 Classes that I have been in charge of: are Functional Foods, Research Methodology, General Genetics. I have also been taking part in a few research projects and supervising some undergraduate theses.

- 4 This university aims to help students develop practical skills in areas of technology. I cannot compare this university to other universities in Japan. However, in The University of Tokyo where I graduated, research was done in order to increase our knowledge, and here in this university students are taught how to apply their skills in their future jobs. This university is much smaller than Todai and does not have graduate schools yet. The facility here is not as well equipped as in Todai.



Liu Tsu Zu, Ph.D.
(1999~2001 scholarship student / Taiwan)



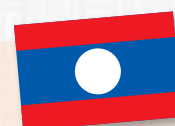
- 1 College of Law and Politics, National Chung Hsing University, Department of Law (Taichung, Taiwan)
- 2 Associate Professor, 17th year since starting my career.
- 3 I am mainly teaching classes on the fair trade act, the obligation part of the civil code, and the consumer protection act. I teach in both undergraduate and graduate schools. The graduate school has a course for researchers and another course for business persons. In the business course, there are a lot of elite business persons who are not specialized in law, but I learn a lot from these students.
Outside of school, I am a member of the Consumer Commission in Taichung City and State Compensation Commission. Also, since I am specialized in competition

policy (antitrust law), I am often asked to work for the Taiwan Fair Trade Commission (such as giving advice on research planning and participating in panel discussions and symposiums).

- 4 In Japan, I feel that university instructors are able to focus on their research and education. However, in Taiwan, instructors are required to perform various other duties, such as work concerning entrance exams (interviews, written exams, document examinations). Individual instructors and the faculty are assessed once every 3 to 5 years, and instructors are under a lot of pressure. In addition, declining birth rates are becoming more and more serious, and instructors are required to join events for soliciting new students.



Onphanhdala Phanhpakit, Ph.D.
(2005~2008 scholarship student / Laos)



- 1 National University of Laos NUOL, Laos-Japan Institute/Faculty of Economics and Business Administration (Laos)
- 2 I have been working for the National University of Laos for 9 years since April 2011. In my first year, I was a member of the Department of Economics in the Faculty of Economics and Business Administration. Then, from May 2012 to July 2015, I was appointed the dean of the graduate school and engaged in the educational development of the master's program. During that time, I also worked as a part-time lecturer at the Laos-Japan Institute. From July 2015 to May 2019, I was assigned to the Laos-Japan Institute, appointed the Vice Director of the institute and strove to form a bridge between Japan and Laos. During that time, I also worked as a part-time lecturer at the Faculty of Economics and Business Administration. From June 2019, I was transferred to the National Institute for Economic Research and appointed Vice Director of the Corporate Development & Economic Integration Policy Research. In addition, I continue to work as a part-time lecturer at the Faculty of Economics and Business Administration.
- 3 I am mainly teaching training methods, finance, and project management in the graduate school program as well as giving instructions on thesis writing to many students in the master's program. Unlike the universities in Japan, seminar classes are not given weekly for each semester at universities in Laos. For example, under the rules of the Department of Economics, the instructor sets the date and time to meet with the graduate school students and provides instruction at least 12 times.
After returning to Laos, I still make business trips to Japan almost every year as an associate member or as an invited

lecturer to Kobe University and Yamaguchi University, and continue the exchanges with the universities and research institutes in Japan. Also, I am expanding the academic and research exchanges with various universities in the ASEAN region. In addition, I have been appointed a member of the think-tank in the Laos National Chamber of Commerce and Industry, and I am focusing my efforts on industry-academic-government cooperation.

Based on the motto of producing academic research with an impact on students, instructors and society, the motto of changing awareness and the motto of having a strong will, I am making efforts and innovations on a daily basis. These efforts and innovations are also created from the values of having pride, being courteous and being responsible as craftsman that I have learned and maintained since my time in Japan.

- 4 Universities and graduate school programs in Laos have a lot of students with work experience (especially government employees) but only a few students who have advanced from the undergraduate course. Therefore, it is possible to acquire and accumulate a wide range of knowledge and experience based on the diverse backgrounds of the graduate school students. Thanks to this large network, it is possible for students to work on their comprehensive research themes concerning development in Laos. Although universities in Laos have very poor research environments and little research funding compared to Japan, generalists are more valued than specialists in Laos. In addition, economists in Laos have a close relationship with the government, and it is one of the advantages in Laos that research outcomes are likely to result in policy proposals.





Nick Love, Ph.D.

(2018~2019 JMSA program / United States)

Born in Michigan, USA. Current medical student at Stanford University School of Medicine. Graduated with Bachelor of Arts in Biology from the University of North Carolina at Chapel Hill, USA.

Japanese medical mnemonics and "goroawase"

Introduction

Physicians, nurses and medical students worldwide use mnemonics to help remember various aspect of medicine, including anatomic structures, differential diagnoses and patient care algorithms. An interesting aspect of a mnemonic's usage, however, is its specific linguistic constraints: a mnemonic formed in English or Japanese may not translate into another language and vice versa.

As a medical student interested in both the Japanese language and medical mnemonics, for my 2018 JMSA project I proposed to investigate how mnemonics are used within Japan.

In April 2018, I was fortunate to be awarded a Honjo-JMSA Scholarship. I immediately booked a flight from San Francisco, California to New York City to attend the 2018 JMSA Annual Meeting. In addition to thanking the generous donors of my scholarship, I also sought to research my JMSA project.

At the meeting, I met with physicians who had trained in Japan or were fluent in Japanese --- I asked them which medical mnemonics they could recall from medical school. This anecdotal survey found "Tuna Croquette" (ツナコロッケ) to be a popular Japanese mnemonic: it helps one remember the Japanese words for the branches of the subclavian artery in proximal to distal order. I soon learned that this type of mnemonic is what is referred to as "goroawase" (語呂合わせ, lit. "sounds of a sentence in addition"), also known as Japanese wordplay.

After the 2018 JMSA Annual Meeting, I reached out to my JMSA-appointed project mentor, Dr. Yuichi Shimada, for further guidance and mentorship. Together, he and I chose a series of goroawase medical mnemonics in addition "Tuna Croquette" to analyze, translate and explain to audiences that may have little to no understanding of the Japanese language. Our hope was to help facilitate cultural and linguistic exchange between English and Japanese medical

communities. Here, I briefly outline some of the results of this project.

Comparing Japanese goroawase medical mnemonics to English acronyms

Famous English medical mnemonic acronyms include iterations of the "ABC" emergency medicine protocol, i.e., Airway, Breathing, Compressions/Circulation; the "ABCDEs" of melanoma warning signs i.e., Asymmetry, Border irregularity, Color changes, Diameter, Evolving/ changing over time); and "MUDPILES" for the potential causes of increased anion gap acidosis i.e., Methanol, Uremia, Diabetic ketoacidosis, Paraldehyde, Isoniazid, Lactic acidosis, Ethylene glycol, Salicylates).

Notably, English acronym-based mnemonics rely the alphabet: each letter of the acronym represents the first letter of its associated word. This works because English words themselves are constructed by combining letters to create syllables. In contrast, Japanese words are formed by directly combining syllables encoded by kanas. Thus, strictly speaking, the Japanese has no alphabet but rather a "syllabary."

To non-Japanese speakers, this difference between English and Japanese can be difficult to understand. I often provide the example of the Japanese word for mountain yama ("山"), which is comprised of two vowel ending syllables and thus written with two kanas "やま" ("ya" や + "ma" ま). Each syllable retains its full sound in the final word, and in this way Japanese is considered an "agglutinative language" i.e., a "glued together language." In contrast, in English, combined letters lose their individual sounds in the resulting word e.g., T + R + E + E is pronounced in one syllable, "TREE."

In addition, the total number of syllables of the Japanese language is comparatively low (~100 versus the over 10,000 in English) and almost all of the Japanese syllables end in vowel sounds. These creative constraints of the Japanese

language --- the vowel-heavy and comparatively low number of kanas --- facilitate the formation of mnemonics known as "goroawase."

Consider the "tuna croquette" ("ツナコロッケ") mnemonic. Interestingly, the Japanese phrase "tuna croquette" has non-Japanese origins: "tuna" may be derived from English via the Spanish word atún (tuna in Japanese is maguro), whereas "croquette" may be derived from French croquer "to crunch.". Thus, because "tuna croquette" is a borrowed, non-Japanese word, it is by convention written in katakana. Each kana in the word represents a vowel-ending syllable, although in this phrase, the miniaturized "ッ" represents a short pause inserted in between the "口" and "ケ" kana sounds. Together, the phrase has a transliteration of tsu-na-ko-ro-(short pause)-kay

"Tuna croquette" functions as a medical mnemonic because each of the first four Japanese syllables of the phrase simultaneously correspond to the first syllables of the words of a branch of the subclavian artery, in proximal to distal order (graphically shown in the figure): "tsu" => "tsukotsudoumyaku" (in Japanese, ツ→椎骨動脈【ついこつどうみやく】(vertebral artery)), "na" => "naikyoudoumyaku" (ナ→内胸動脈【ないきょうどうみやく】) (internal thoracic artery), "ko" => "kojoukeidoumyaku" (コ→甲状頸動脈【こうじょうい

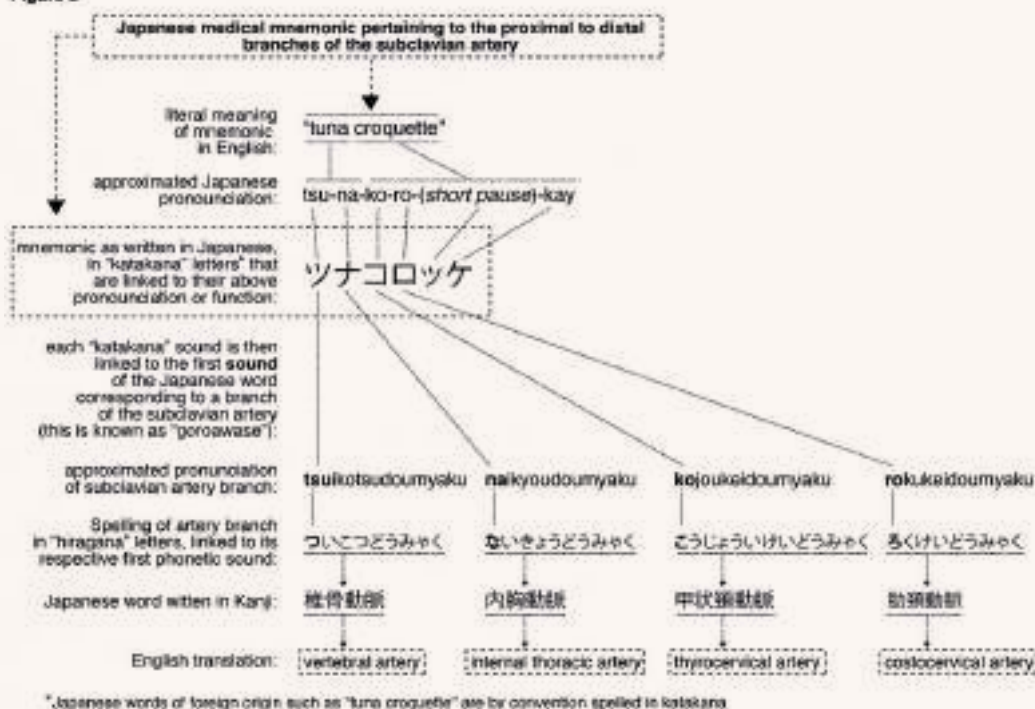
けいどうみやく】) (thyrocervical artery), "ro" => "rokuheidoumyaku" (ロ→肋頸動脈【ろくけいどうみやく】) (costocervical artery).

This type of mnemonic formation, whereby the vowel ending syllables of a word encode the syllables of a separate distinct phrase, is an example "goroawase". What I find interesting about this mnemonic is how it relies on the inherent nature of the Japanese language and its comparatively small syllabary that is predominately vowel-ending. Again, these features facilitate goroawase formation because many Japanese words share the same beginning syllable, much like many of our English words share the same letters.

In fact, many more examples of medical goroawase can be found on the internet. However, in Japan, goroawase are more classically known as a way to add meaning to strings of numbers such as telephone numbers or building addresses.

In terms of medical education, Japanese goroawase mnemonics are particularly interesting because they represent a type of mnemonic that only functions within Japanese, whose meanings are lost following translation into English. They may be of intrigue to those interested in how language provides creative constraints as well as the international scope of medical mnemonic formation, a process germane to medicine worldwide.

Figure 2



Dream at my footsteps



Aduayom-Ahego Akouetevi, Ph.D.
(2015~2018 scholarship student / Togolese Republic)

Aduayom-Ahego Akouetevi was born in the Republic of Togo in West Africa. He studied prosthetic and orthotics technology in Togo and in Japan. In 2018, he earned a doctoral degree from the Niigata University of Health and Welfare. He is currently working to deliver prosthetic and orthotics products into Africa while engaging in research and development at DreamGP Inc. (Osaka).

I had the privilege to be granted Honjo International Scholarship during my doctoral course (2015-2018) in Graduate School of Health and Welfare of Niigata University of Health and Welfare. My research interest is in motion analysis focusing on the evaluation of hip joint center location, muscle activities, the evaluation of the performance of gait motion analysis devices and development of Prosthetics and Orthotics service and education in sub-Saharan Africa region.



Overview of needs of prosthetics and orthotics service in Africa

People in need of assistive devices globally is beyond two billion by 2050 and only one in 10 could get access to assistive product. Of the 650 million people worldwide living with some form of disability, 80% live in low resource countries. In sub-Saharan African, the population of disabled people is beyond 78 million. Due to lack of rehabilitation facilities and its affordability, the patients find it difficult to be fitted with prosthetic devices. In Ghana for instance only 5% of population of disability receive care. Major limb loss are due to trauma, diseases or congenital deformations. This leaves the patients with long life reduced mobility and stigma. Without access to high-quality assistive product, people with amputation are at high risk for exclusion, dependence, isolation and, ultimately, poverty, all of which entail great social and economic costs for families, society and the country. The reintegration into a sociable life is very necessary for any amputated patient. Although people with disability are in need of prosthetics devices, availability is limited. Current study in Ghana highlighted some of the challenges the prosthetics service face mainly lack of sufficient facilities and care providers. To foster the development of the rehabilitation service in the country, an attempt of providing prosthesis to

people in need has to be considered. To achieve that mission a prosthetics and orthotics satellite office has been established in Ghana in 2016.

Bringing back the smile

The hope for every amputee is to regain the ability to stand and walk again. In order to provide affordable prosthetic leg for patients, used prosthesis parts have been collected from some prosthetics companies across Japan. These parts were recycled, then used in the rehabilitation of an amputee in Ghana. The prosthesis allows the patient to stand, to walk and to go back to his normal daily activities.



Introducing Silicone finger prosthesis in Ghana

The rehabilitation of patients with finger amputation in developing countries remains very challenging for technicians due to training facilities and lack of appropriate materials.

The silicone technology for instance has not been introduced in many undergraduate programs in the Prosthetics and Orthotics schools in developing countries. To fill that gap the silicone technology that I acquired in Japan has been used to fit the loss of fingers of a patient in Ghana. The appearance and the aesthetic aspect of finger prosthesis play a significant role in patient's life in such a way that the fingers provided have to be similar look as the patient's skin color. The rehabilitation of multiple-fingers loss using real silicone cosmetic finger prostheses was one of the first attempts to fit a user in Ghana. Regaining hope and be socially comfortable is always a good wish for any amputee.



Ahead of Tokyo 2020 Paralympic: manufacturing of first sport prosthesis in Togo for a para athlete

Togo has never presented a para athlete using sport prosthesis. Through the support of the Japanese Academy of Prosthetists and Orthotists, a project was carried out in collaboration with Okino Sports Prosthetics & Orthotics company based in Tokyo. We then manufactured for the first time a sport prosthesis for an active amputee in April 2019 in Togo. The athlete will train with the new prosthesis and will hopefully represent Togo during Tokyo 2020 Paralympic games.



Future perspectives

- establishment of testing tools to check the efficacy and quality of the recycled prosthesis parts
- develop a strategic plan to collect in a bigger scale the recycled prosthesis from companies in Japan
- collaborate with international institutions and non-governmental organization for sponsorship
- establishment of satellite centers in remote areas in order to serve locally populations living with physical disabilities
- develop an expert and elite team to foster and boost the technology transfer of the new trends of prosthetics and orthotic service in sub-Saharan Africa.
- create prosthetics and orthotics academic hub in Ghana for English speakers and Togo for French speakers

Surprised! But honored by their visit

The day Chihara Seiji San the "African Traveler" and some crews of Broadcasting System of Niigata TV came to look for me for an interview in our University. The TV program (shown on Niigata BSN January 13th, 2018) was about looking for African living in Niigata and I was nominated.



Lastly

I sincerely thank Honjo International Scholarship Foundation and all the staff for supporting international students to achieve their dreams by bringing back some development to their home countries. I am still trying my best to be the bridge between Japan and Africa and contribute to the development of rehabilitation service, education and research. With open heart to a whole new world to learn new things, Dreams at my footsteps.

My Life as a Radical Behavior Analyst



Kohei Togashi, Ph.D.

(2018~2019 Japanese Student in Overseas Program / Japan)

Kohei Togashi was born in Saitama, Japan. With the aim of creating a society in which people with disabilities and their families can actively participate, he studied in Japan and in the United States and obtained qualifications as a clinical psychologist and a certified behavior analyst. In April 2019, he earned a doctoral degree in behavior analysis from Western Michigan University. Currently, he is providing services to people with disabilities at Therapeutic Pathways The Kendall Centers.

Current Status of Support for Individuals with Developmental Disabilities

While advancements in technology enabled us to live convenient and comfortable lives, supports and treatments for individuals with disabilities in Japan are far from adequate. For example, the importance of supports for individuals with disabilities has been recognized in laws and legislations, and support systems have been developed over the years. However, research that aims to seek interventions based on empirical evidence have just began (Tanba, 2001), and specific intervention methodologies for individuals with developmental disabilities are limited (Kobayashi, 2012). Besides, most of the supports and interventions provided for individuals with developmental disabilities in Japan are anti-science or pseudo-science (e.g., using psychoanalysis to treat autism). Also, there are many individuals with disabilities and their families who have been seeking help from development support centers and/or hospitals for years, without achieving much objective and clinically meaningful outcomes. In contrast, in the United States, dissemination of specific and evidence-based interventions has been taking place after the reauthorization of Individuals with Disabilities Education Act in 1997. As an example of such movements, in the United States, applied behavior analysis (ABA) has been the first-line treatment for autism. In 1998, certification of behavior analysts has started. With increasing demands and dissemination of ABA services, 31 states mandate practitioners to hold license in ABA in order to provide ABA services (as of April 2019). Additionally, 46 states mandate the cost of ABA services for individuals with autism to be covered by insurance (as of June 2017).

What I Would Like to Achieve with My Life

My dream is to disseminate treatments that produce meaningful and objective outcomes for the individuals with disabilities and for their families in Japan. As one of the means to make this dream a reality, I would like to promote proper understanding of ABA and to disseminate ABA. 'Producing meaningful outcome for individuals with disabilities and their families' and 'objective and continuous evaluation of treatment outcome' are two of important elements of ABA (Baer, Wolf, & Risley, 1986). However, those elements are lacking or inadequate in most of the widely-used treatments in Japan. Also, there are many "ABA services" in Japan that are not true ABA services.

What I learned in the United States and My Research Activities

While I worked in Japan, I enrolled in an ABA program to improve my professional skills and knowledge regarding ABA. In 2014, I obtained a credential in ABA (Board Certified Behavior Analyst: BCBA) offered by a United-States-based, non-profit organization (I was the tenth individual to obtain the credential in Japan). In 2016, I started my doctoral program in behavior analysis at Western Michigan University (WMU) under Dr. Richard Malott, as a Fulbright Scholar. At WMU, I learned how to help children with autism. Also, I learned how to design and implement effective staff training, and how to analyze and design organizational systems using behavior analysis.

In my dissertation, I helped children reduce problem

behaviors (e.g., flopping to the floor, and screaming) during transitions between activities and locations, and promoted their ability to walk and transition independently in a school setting. Some research designs commonly used in ABA are difficult to use in applied settings, and the majority of practitioners do not publish their practices in peer-reviewed journals (Malott, 2018). Therefore, I used and examined the practicality of a practitioner-friendly research model in my study. Furthermore, I designed and implemented a system that is tailored to the classroom to ensure accurate implementation and continuous evaluation of the intervention by the classroom staff, after I graduate from WMU.

My Plans After the Graduation

After my graduation from WMU, to gain more clinical experiences in the U.S., I am going to work under Dr. Jane Howard at an autism center in California for about a year. After working with Dr. Howard, I am going to work as a

part-time instructor at Chuo University in Japan. Also, once I return to Japan, I would like to work with professionals in variety of areas—my hope is that, it will result in dissemination of supports and treatments based on ABA in the country. For instance, by incorporating behavior analysis (science of behavior) in staff training, the organization can teach new skills to their employees more effectively and efficiently. By working together with professionals in different areas and by producing outcomes that are meaningful and large enough for them to be “visible”, I would like to advocate for effectiveness and versatility of ABA.

I have been helped by many people, including everyone in the Honjo International Scholarship Foundation. Children with developmental disorders and their families gave me a life goal. After returning to Japan, I would like to return those favors by using the knowledge and skills I acquired in the United States to the best of my abilities.



Western Michigan University



A rail trail that originally ran 33.5 miles (55 km) between South Haven, Michigan, to a point just west of the city of Kalamazoo, Michigan



A view of the city of Kalamazoo overlooking from the hill of Western Michigan University

HISF Annual Activities in 2018

1 Doctoral Dissertation Presentation Program

May 20, 2018

Doctoral dissertation presentation program was held with four presenters, who graduated in March 2018.



Kyohei Hisano



Laura Liliana Abril Garcia



Aduayom-Ahego Akoueteve



Kai Kitamura

2 Akabane Marathon

June 9, 2018

Akabane Marathon 20 Kilometers Relay for first time in 2018.



3 Shizuoka Trip

June 15-16, 2018

We've visited and observed Central Research Institute and Hamaoka Plant of Itoen and the PET bottle beverage manufacturing plant.



4 HISF Workshop Vol.13

July 29, 2018

A lecture by Dr. Kanyiva Kyalo Stephen, titled "The Role of Metal Catalysts in Manufacture of Goods in Sustainable Society", was organized.



5 Tohoku Water Distribution Volunteer Excursion Tour

September 29-30, 2018

Iwate Prefectural University, Ohio University and Honjo International Scholarship Foundation organized a joint program to assist restoration from the Great East Japan Earthquake.



6 A seminar of Food and Health Research fellowship Program

November 8, 2018

Research grant awardees presented their results on "Food and Health" research.



Koichi Yamada



Kaori Kinoshita



Keiko Unno



Masahito Shimizu



Takako Sakamoto



Yoshimi Kishimoto



Hisami Okumura



Yoshitake Baba
(Central Research Institute of Itoen)

7 HISF Workshop Vol.14

November 10, 2018

A lecture titled "Quantum Communications, Quantum Computers and Cryptography", by Dr. Bagus Santoso was organized.



9 The Year-End Party

December 20, 2018

The party was more excited by the 'China Quiz' performed by Mr. Li Hao from Kyoto University.



10 Welcome & Farewell Party and Research Grant Awards Ceremony

March 27, 2019

We've organized the welcome program for the new HISF scholars, Farewell program for those who graduate by March 2019 and the awarding ceremony for the "Food and Health Research Program" awardees.



Alumni



Freshman

Video message
from alumnus



8 Akabane Marathon

December 8, 2018

We'd run successfully the Akabane Marathon 20 Kilometers Relay 2nd time in 2018.



Oh Daehyeon made his debut as a writer



Oh Daehyeon (Born in South Korea, 19th generation) earned a doctoral degree in astronomy from The University of Tokyo and is currently working for the Korea Meteorological Administration. He published his first short science fiction novel titled "Great Silence" in the fall of 2019. Fiction writing has always been one of his hobbies, and now he successfully made his debut in the literary world. "Great Silence" is only available in Korean for now, but we hope translated versions will also be published in Japanese and English.



Oh Daehyeon, Ph.D.
(2015~2016 scholarship student / Korea)

Student dormitory is now available

The Shunpu-so student dormitory opened in April 2018. Guest rooms are also available, so graduates of the Honjo International Scholarship Foundation are welcome for short stays. Please feel free to contact the administrative office or visit our website for more details.

Overview of the student dormitory

Name	Shunpu-so
Address	2-16-2 Oji Honcho, Kita-ku, Tokyo (11 minute walk from JR and Tokyo Metro Oji Station)
Number of rooms	8 (4 rooms for male students on the first floor; 4 rooms for female students on the second floor)



Topic Another student dormitory will open in Kyoto

Currently, an old Japanese-style house is being renovated into a student dormitory. A guest room will also be available, so please feel free to stay on your next trip to Kyoto.

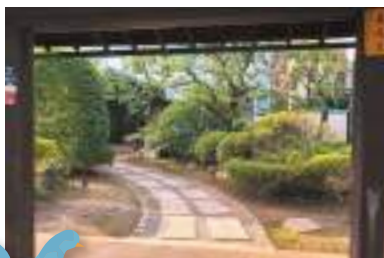
Scheduled opening : April 2020

Overview of the student dormitory

Name	To be determined
Address	Horikawa-dori Nakadachiuri-sagaru, Kamigyo-ku, Kyoto-shi
Number of rooms	6

Four seasons at Shunpu-so

A variety of flowers can be seen blooming throughout the year in the Japanese garden at Shunpu-so. Please visit us and enjoy the beautiful four seasons in Japan.



Shunpu-Yose

Shunpu-so often invites people in the neighborhood to see a "Shunpu-Yose," a Japanese traditional comic storytelling. We hope it will offer an opportunity for foreign students and their neighbors to communicate with each other.

